

美好的日子

(素晴らしき日々)

上海での5年間は
私たち家族の青春時代だった。



関西帰国生親の会かけはし
茶野木信子

上海の街並み

幾多の紆余曲折を経て上海へ

2010年春、息子の小学校入学と時を同じくして、夫は上海に単身赴任した。最終的に私と息子は1年遅れで同行することになるのだが、それを決心するまでには幾多の紆余曲折があった。私は夫が単身赴任することに悩みながら、新築して数年の自宅を空けること、また、特に食品の安全性が気にかかり、同行することを躊躇していた。

そんな私が家族で暮らすことを決めたきっかけは、当時息子が通っていた小学校の先生のお話だった。「家族の青春時代は、子どもが小学生のころです。どうか今を楽しんでください」。

みんなが転校生

11年3月、日本人が多く居住する古北地区のマンションに転居した。上海日本人学校虹橋校まで約3キロ、マンションのバスで通うことになった。息子にとって初めての転校を私はとても心配していたが、担任の先生から「2日目には前からいた児童みたいになじんでいましたよ」と聞いて安心した。日本人学校では、多くの子が一度は転校生。それから卒業するまで、息子もまた転校生を受け入れ、転出していく友だちを見送ることが日常となった。

上海日本人学校では、日本ではできないことを数多く経験できた。中国語や英語の授業はもちろんのこと、現地校やインター校との交流会が定期的に行われた。中国の文化を中国の方から習うチャレンジタイムという行事も各学年1年に一度あり、カンフーや雑技、苗族の伝統的な刺しゅうなどを体験した。6年生の修学旅行では北京に行った。大気汚染がひどい北京において、奇跡的に滞在中は汚染度が低く青空が広がったと聞いた。北京ダックがおいしかったこと、万里の長城に登ったこと、お土産屋さんのおじさんに値段交渉をして安くしてもらったこと、中国語が上手だねとほめられたことなどを息子は帰宅後興奮気味に話してくれた。



日本人学校のチャレンジタイムの様子

トラブルも後になれば笑い話

良くも悪くも上海での思い出は数えきれな